

今回は、現地出身の友人が、少年時代から良く知っている土地を、一緒に歩いてくれたからこそ、安心してキノコ探しが出来たわけです。

植物相が豊かということは、野生動物もたくさんいるはずですよ。それを友人に尋ねると、彼はこう言いました。

「たくさんいるよ。熊はあんまりみないけどね。飼い主のいない雄の水牛は気が荒いし、近寄っちゃダメよ。あ、あと、虎がいるからね。夕方になったら、森に入っちゃダメ」

「え？虎？ 見たの？」

「見てないけど、声するよ。2年前に、うちの山羊と犬がやられたね」

「やられたって、食べられたってこと？」

「そう。虎は山羊と犬が大好きね」

「人間は？」

「人間は、そんなには好きじゃないね」

「そんなには」っていうところが妙にリアリティがあってとっても怖くなったのでした。



カピラバस्तゥ城の東門跡に佇む筆者

□

【紹介／p. 27の関連記事】

ブラーさんのヒトヨタケ・インク

ファーブルの昆虫記に匹敵するといわれる A. H. R. Buller (1874-1944) の『菌類の研究』(全7巻)。その第4巻にヒトヨタケ・インクの記述があります(文献1、69-72頁、図参照)。約百年前の本ですが、さらに昔のフランスの P. Bulliard (文献2、全600葉の図譜集) や、M. Boudier (文献3) のヒトヨタケ・インク情報も一緒に紹介されています。ヒトヨタケのインクの方がササクレヒトヨタケよりよく(粘性がある)、粘性を上げるためアラビアゴムを入れるとよい等のコメントも(文献3を引用)。ブラーさんは、ヒトヨタケ類好きで、今読んで驚くようなきのこ話が沢山掲載されていて、百年前の本とは思えません。ブラーさんの本は私の手元にあるので興味のある方はどうぞ。(吹春俊光)

【文献】

- 1) Buller, A. H. R. (1931) *Researches on Fungi IV*, Longmans Green and Co., London.
- 2) Bulliard, P. (1784) *Herbier de la France*, Paris.
- 3) Boudier, M. (1876) *Notice Sur L' encre De Coprin*, Bulletin de la Société Botanique de France 23: 299-302.
(文献3はタイトルで検索するとダウンロードできます)

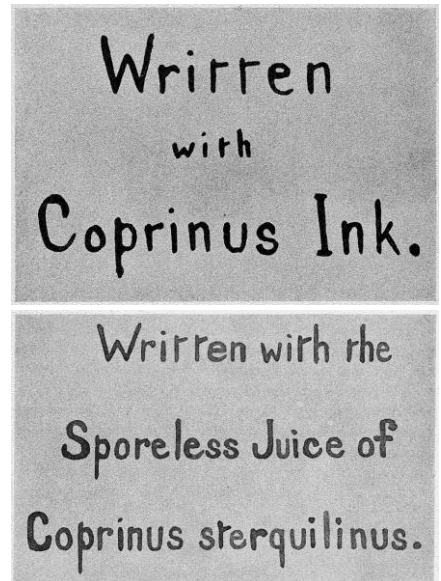


図1 (上) マグソヒトヨタケのヒダがとけた汁で書いたもの。文字が黒々としているのは黒い胞子が含まれているため。
図2 (下) 胞子を漉しとって24時間置いたもの。黒い胞子無しのためインクの色は胞子が混じる図1の方が濃い、しかし胞子無しでも意外と黒い(酸化のためと説明がある)(図1・2とも文献1)。